

先史時代から歴史時代までの屈斜路コタン

資料館のこの箇所は、縄文時代（紀元前 10,000 年～紀元前 300 年）から、1858 年に屈斜路コタンが初めて文書に記録されるまでの北海道の歴史に焦点を合わせています。

各時代の工芸品が、時系列順に展示されています。

文書史料では、屈斜路コタンがいつ成立したかについてほとんど情報がありません。しかし、屈斜路湖近くで発見された土器には 7,000 年近く昔のものがあり、早くに居住者がいたことの証拠となっています。ここには、弟子屈で発掘されてきた、骨製の道具、小刀、パイプ、硬貨（すべて 1300 年以降のもの）が展示されています。

アイヌ社会の発展

アイヌ文化は、13 世紀頃から発展を始めました。ほとんどのアイヌの村は、屈斜路コタンのように、河川やその他の水源の近くに建てられており、サケとマスが主な食料源でした。アイヌはほぼ狩猟採集民でしたが、交易は行っていました。日本や中国の人々に、鹿の毛皮、クロテンの毛皮、鷹の羽根を渡し、他の品々（鉄、綿織物、漆器、首飾り用の玉など）と交換していました。

アイヌ語のさまざまな地名

屈斜路コタンに言及した最初の文書記録は、1858 年のものです。この年は、日本の探検家・著述家・絵師である松浦武四郎（1818～1888 年）が、現在の北海道を調査した年です。彼の地図「東西蝦夷山川地理取調図」は、屈斜路コタンの村に言及しており、この村の各地区のアイヌ名を記しています。資料館を訪れる人は、この地図の複製が展示されているのを見ることができます。アトサヌプリ（硫黄山）、カムイヌプリ（摩周岳）といった山のアイヌ名や、その他の地形のアイヌ名は、現在も弟子屈で使われています。